
ユイにゃん 青春物語

アップルマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コイにゃん 青春物語

【Zコード】

Z5782M

【作者名】

アップルマン

【あらすじ】

Angel Beatsより。コイロ向音無奏コリたち恋愛します。ビバリー・ヒルズ青春白書の始まりです！（＾＾；

一番星　願いと出会い（前書き）

天使高等学校は偏差値70です。

一番星 願いと出会い

三は、東京都練馬区にある天使高等学校。

ピンク頭に黒いシツポを付けた小柄な少女ユイは今年入学したばかりだ。彼女はこれから学園生活に夢を抱かせていた。

「はあー やつぱり軽音部ってカッコイイ！入るしかないんじやコレ

思ひ出でし物は彼女にやへ意氣込むと
軽音部の工作を

Girls Dead Monster 通称ガルデモは、全校生徒の憧れの的だつた。メンバーは、ギターのひさ子・ドラムの入江・ベースの関根。ボーカル&ギターをしていた岩沢は、2日前に親の事情で惜しまれながら転校していつた。現在は、ボーカルオーディションを実施中である。

あたしなじやわNo.1

エイのオーティシミンの腰痛が軽くなってくれる。

歌う歌は C r o w S ong. ジヤーンン

——私 音楽が好き！もつともつとやりたい！なんか体が熱くなるう

「アーリー、アーリー！」

ユイは調子にのり歯ギターをするも耳をさくような音に、ガルデモのメンバーは苦痛な表情をする。

「ストップ！ストップ！」

ଶ୍ରୀମତୀ ପାତ୍ନୀ କଣ୍ଠାରୀ

「もつと語ってこよ。」

がん！

コイは落胆し、軽音部を後にした。

コイは中庭の土手に仰向けになり、空を見ていた。

「あたしは何をしても上手くいかなーー
その時、なんか白い物が向かつてくる…

「きやーっ！」

ボコッ！と大きな音をたて、頭に当たりボールは転がっていく。
コイはそれに近づき手にとつた。

「野球のボール…？」

「おーーーすみません！」

振り返ると、野球部のユニフォームを着た男の人が走つてくる。

「大丈夫でした！？ケガはないかな？」

その少年は青髪のサラサラヘアで、野球部員とは思えない容姿であつた。オーディションの失敗と頭の痛みに苛立ちを覚えたコイは、彼に爆発する。

「人が気持ちよく寝てんのに邪魔するとはどーいうことだクルア！
だいたい野球部は昔から坊主だー！チャラチャラしてんじゃねーぞ
つてクうラアー！」

時々出る口の悪さを、コイは初対面の人に出してしまつた。

「はーー！お前もピンクの頭だろーが！人のこと言えないだろーが！
「私は軽音部なんだからいいんだもん！野球部には野球部の頭つて
もんがあるんだコルアー！」

と言ひながらコイは、青髪の野球部員に後ろから飛び付き首を締める。

「いたたたた…！そーくるかあ！」

青髪の野球部員はコイの腕を掴み、地面に押し倒す。

「いついたーー！」

青髪の野球部員はコイの両手を押さえ、馬乗りになる。
「きやーー！先輩許してくださいーギブですーギブ！すみませんでし
たあー！」

「解ればよろしい！」

そつ言うと青髪の野球部員は、ユイを優しく起こす。

「ちょっと待て！お前は年下なのか！？」

「ただ後輩キヤラ演じただけです！」

ユイは言つ。彼の名前は日向。本当に先輩であった。
——あれっ！？あたし落ち込んでたはずなのに——

一番星　願こと出念ご（後書き）

読んで頂もありがとうござります！

一番星 自己紹介とチャンス（前書き）

学校は15時半に終わります。

一一番星 自己紹介とチャンス

「はあー」

ユイはため息をついていた。

「——これから何しよつかなあ——

考えても答えは出ない。

ユイは力なく中庭に寝転ぶ。今日も雲ひとつないきれいな空だった……。

——あれ!? 白い……

ゴン! と何かが頭にあたる。

「いつたーい!!」

野球ボールのようだ……。ユイは頭を撫でながら叫ぶ。

「またかコルアー!!」

「まあまあ! そんなに怒んなって! 落ち着こ'うな。」

青い髪の少年、日向は苦笑いしながら言う。

「センパイ昨日の今日ですよ。……やつぱり許せんのじや コルア——!」

そしてプロレスが始まつた。しばらくして……

「センパイ! いたーい! ギブです! ギブギブ! すみませんでしたあ!」

非力なユイは、奇襲を仕掛けない限り日向には勝てないのだ。

「お前はなんでそんなにケンカっぽやいんだ!? なんか変なヤツだな。」

日向はユイの隣に座る。

「センパイ練習は大丈夫なんですか?」

「んーオレ一人居なくとも野球部は大丈夫だろ。」

日向は伸びをしながら言う。

「あーセンパイ球拾いばかりやらされてそりですもんね。」

「オイ…！」

田向はユイに両手で襲いかかるフリをする。

「センパイ…冗談でーす！」

ユイは田向に笑いかけた。

「お前名前何て言うんだ？」

田向はユイに向かって言つ。お互に自己紹介をしていなかつたのだ。

「ユイです。センパイはあ！？」

「田向だ。よろしくな！」

「はー！よろしくお願ひしまーす！」

ユイは元気よく答えた。依然として田向は練習に戻らうとしない。

「センパイあんまり野球好きじゃないんですか！？」

「ならとっくに辞めてるわ！いや…お前にそいつもこので寝てるみたいだけど、何かあつたのかあ？」

図星な質問にユイの体はギクつとなる。

「いや…別に大したことないですよ！ただこの場所が好きなんですよー！」

ユイは慌てて言つ。

「そつかあ。何かあつたらいつでも言えよー相談乗るから。じゃあなー！」

そう言つてユイの頭を撫でると、田向は練習に戻つて行つた。

「…なんだ。あのセンパイ超優しいじゃんーー

ユイはまた一人になつて少し寂しくなつた。の人と会つ前は一人でも寂しくなかつたのに…。

ユイはとうあえずもう一度横になることにした。

「あつこんなところいた。おいお前…」

ユイは誰かに声をかけられた。

「えつ…ひさ子先輩？？びーしたんですねー？」

ユイは憧れの先輩の登場に驚く。

「ボーカルオーディション終わったんだけど皆何か物足りなくて困つてたんだ。」

「ぎやふん。そ…それで…？」

ユイは傷つきながらも質問を返す。

「お前だけ途中だったからもう一回やるよ！」

ひさ子は付いて来いと手招きし、音楽室の方へ向かう。
——うそつあたしまだチャンスがあるんだ……

ユイは笑った。

一一番屋　自己紹介とチャンス（後書き）

読んで頂きありがとうございました（ト・ト）

三番星 欲喜と失望（前書き）

よろしくお願ひます（^-^）

三番星 欲喜と失望

コイは夢中だった。

Crow Son ばかりでなく Alice meny・My Son もなど立て続けに計5曲も熱唱した。コイを止める者は誰もいなかつた。

ジャーネンー！

「はあはあ…」

完全燃焼だった。これでダメでも納得できる、コイは心の奥からそう思つた。

余韻が残るなかひさ子が口を開く。

「アンタの歌声いまいち心に響かないけど…」

「ぎやふ…。」

コイは下を向く。

「でも…魂は伝わったよ。オーディションメンバーの中でアンタが一番ガルデモのファンだな。」

「えつ…。」

コイが顔をあげると田の前に右手があつた。

「よろしくな。コイー。」

ひさ子は笑つた。

「は、はー！」

コイは笑いながら泣いた。

そして、両手でひさ子の手を握りしめた。

——やつたあ！わたし……わたしガルデモなんだ……

ユイはいつもの中庭に行く。でも、いつもとは気分が全く違う。なぜか野球ボールが飛んでくることを期待している。

だが、都合良くボールが飛んでくるはずがなかつた。

「はあ……帰る。」

——はつーそーいえばわたし喜びを分かち合える友達がまだ学校にいない！？——
大問題だつた……。

グラウンドの脇道から野球部の練習が見えた。

「ほんと落ち込んでる時はボールぶつけるくせに、嬉しい時は何もないなんて空氣の読めない先輩なんじゃクルアーハーフてあれ……」

田向は笑っていた。茶色のサラサラヘアの野球部員とじやれあい、なにやら楽しそうな様子。

「なにあれ……デレゲレして……？？手つないで……？？」

ユイは2人に釘付けになる。

——えつえつ……

「センパイつて…。」

ユイはガクッと脱力してしまった。

「…関係ねーしー。ユイにやんはルンルンで帰つてやるんだクルアー！」

ユイは川沿いを歩いて帰つた。夕日が眩しくて前が見えない。

「つて友達作らないと！」

ユイは夕日が目に染める。

「センパイのバカアアアーー！」

三番星 欽喜と失望（後書き）

つづく…

四番星 敵と味方（前書き）

天使高校の生徒会長は学年関係なく投票で決まります。

四番星 敵と味方

今日は朝日が眩しい晴れ晴れとした空だ。ユイはいつもの川沿いを登校していた。

「るんるんるーん！」

——何はともあれ今田からガルデモだあ！——

「張り切つて練習するんだクルあー！——」

ユイはガツツポーズで意気込んだ。

「…。」

ふと視線を感じたユイは川辺を向く。

真正面には太陽が…、ユイは目を細めた。

——ま、眩しい…誰…天使！？——

「あつ同じクラスの…えつと委員長！？」

ユイの視線の先には白髪の小柄な女の子、立華かなでが立っていた。

「おはよー。」

かなでは無表情でユイに言ひ。

「おはよーーかなですかやんだよねー？家この辺なのお？？」

ユイの質問にかなではうなづく。

「この川が大好きでいつもここを通っていくの。」

かなではそう言ひと少し微笑んだ。

——かなでちゃんつて…可愛い――

二人は一緒に登校することにした。

「今日テストだけど、ユイちゃんは気合いばつちりだから大丈夫そう。」

「え…えーっ！テスト…？かなでちやん私そんなの聞いてないよお…委員長クラアー！」

ユイは突然の知らせに焦っている様子。

「私そんなこと知らないわ。」

かなではユイとは正反対にそこはかとなく冷静だった。

「かなでちやーん…冷たいよお。」

ユイは寂しくなつて思わずかなでに抱きついた。

「じゃあ学校着いたらテストに出るといろ教えてあげるね。かなでは優しい声で言つた。

「ありがとー。」

ユイはまたまたかなでに抱きついた。

「ユイちゃん暑いわ。」

ユイは抱きついたまま顔を上げる。

「…やつぱりかなでちやん冷たいんじやクラアー（泣）」

なぜかユイはかなでと友達になることを決意したのであった。

「じゃあユイちゃんむつきの意氣込みは何だったの？」

かなでは不思議そうに尋ねた。ユイの熱血さが珍しい様子。

「よくぞ聞いてくれました！ユイにゃんはガルデモのボーカルに選ばれたんだよお…！」

「へー…。」

満面の笑みで両手を広げハイテンションで決めていたユイも温度差に気付き恥ずかしくなる。

「かなでちゃん…ユイにちゃんと寂しくなつたよ…」

すると、かなでは真剣な表情でユイを見る。

「ユイちゃん…私生徒会に入ろうと思つてゐる。」

「生徒会…？」

「ガルデモつてゲリラライブしたり、あと校内に過激なファンもいるから生徒会内ではBAD GIRL通称BGつて言われるブラックリストに載つてゐるよ。」

「へ…？ へえ…？」

ユイの額には冷や汗が…。

「ユイちゃん私たち敵だったのね。」

かなでは無表情で言ひ。

「ガードスキル…」

「かなでちゃん! そんなこと言わないでよーーー! ってかガードスキルって何!? わわ…物騒な棒は閉まつてくださいーー私たち絶対仲良くなれるよ!」

ユイはしつこくかなでに抱きつく。

「ユイちゃん…暑いわ。ガードスキル…ハンドソニックバージョン
4…」

「わわわ…かなでちゃん! ガルデモの時は敵かもしけないけど、でもでも普段のユイにゃんは敵なんかじゃないよ! かなでちゃんの味方だよ…そうだよ。私たち友達なんじゃあコオルアー…！」

ユイは恐る恐る顔をあげると、かなでと皿が合ひ。

——えつ——

かなではもう武器を構えていなかつた。コイに向かつて笑いかけて
いる。

「かなでちゃん…」

「コイちゃんって面白いね。」

かなでは満面の笑みだつた。

「かなでちゃん…大好き！これからようしくなんじやクルアー！」

「とこりでかなでちゃんそのへんで拾つたような汚い棒早く捨てな
よお！」

「ダメよー」これはガードスキルなんだから。コイちゃんにはわから
ないわ。

「へー…」

二人はその日学校を遅刻してしまつた。

四番星 敵と味方（後書き）

呼んでいただきありがとうございました〜(^o^)/

五番星 ガルデモと生徒会（前書き）

かなでは全国模試1位です。

五番星 ガルデモと生徒会

その日のテストは散々だった。

かなでは正確にテストのヤマを教えたはずなのに、全て無駄となつた。

「か…かなでちやん…」

「ユイちゃんどうして?」

「さやふ…」

ユイにはこの高校はレベルが高かつたようだ。机に肘をつきユイはうなだれる。

——が——ん——

その時教室のドアの方から声が聞こえた。

「おーい! かなで。今日もお弁当ありがとなー…」

茶髪のサラサラヘアーの男の子だ。

ユイも声につられ振り返る。

「あつ!」

——田向センパイがテレナレしてた茶髪の野球部員だ——

「音無くん。」

かなでは駆け足でその男の子の元へ行く。

「今日は余りものでちょっと自信ないけど。」

「良いって! 気にすんな。残さず食べるからなーお前もしつかり食べて大きくなれよ。」

そう言つと音無はかなでの頭をポンポンと撫で、どこかへ行つてしまつた。

——はつもしかして……

「かなでちゃんさつきの人彼氏！？彼氏だよね！？」

「ううん。幼なじみの一人上の先輩なの。」

コイは期待外れな顔をする。

「えーすじくお似合いだよー。付き合つたりやえぱいーのに！」

「私は好きなんだけど。向こうは男の子といの方が楽しいみたい。」

その言葉でコイは確信を得た。そして……

「ぎやふ……」

——やっぱりそーなんだ……はあ——

コイはテストのことなどすっかり忘れていたが、心底落ち込んでいた。

その時教室のドアの方からまたまた声が聞こえた。

「おーい！コイー！」

コイが振り返るより先に教室が騒然となる。

「わあーちょっとひさ子先輩だよ！」

「きやーこんなに近くで見れるなんて！」

「おい！見ろ！ガルデモだぞ！ガルデモ！」

コイはクラスメイトの騒ぎをよつと逆に引いてしまった。

——ちよつと待つて……

コイの顔がみるみる青ざめていく。

——こんな皆の憧れガルデモの次期ボーカルがコイなんて知つたら……フーリガン並みの暴動が起きちゃうんじゃ……やばっ怖い——

「コイーーー。今日の初練習は授業終わつたらすぐするからダッシュで
来いよー。」

「ひや子先輩だめえーーー！」

「コイのほうが数秒遅かった……。ひや子は不思議そうな表情をするも、
じゃあなたと教室を後にした。

教室はすっかり静まりかえつていた。

「あれー? 皆さん何か聞こえちゃいましたかーーー?」

「コイはどうあえずすつとぼけてみた。

だが、駄目だつたようだ。

「はあー若沢さんの代わりがコイツなのー?」

「ぎやふ…」

「えー やだあーーー！」

「ぎやつふ…」

「こんなイカれた小娘にはムリだるー!」「ぎやふーん! ひどいーーてめえらあ コイは何言つても傷つかない
とか思つてたら大間違いなんだぞーーー! ってかまだ入学して2週間な
のにめえらどんだけ団結してんだクラアーー次のゲリラライブ見
てろつてんだー皆感動させてやるーー号泣することになるんだクル
アーーー!」

教室は再び静まりかえつた。

——はあはあ……やばいよおーついに大きいこと言つてしまつたあ
——

「こまのは聞き捨てならないわねー!」

「えつ……?」

コイが振り返るとパールピンク色の頭にリボンをした氣の強そうな
女の子が立っていた。

「誰ー?」

「生徒会長のココローこれからよひしへね B A D G I R Lちゃん

…」

——ひいい——

五番星 ガルデモと生徒会（後書き）

読んでいただきありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5782m/>

ユイにゃん 青春物語

2010年11月27日11時46分発行